Dhādekī–Sālhāpūr の Brahmin と被差別 caste

——北インド農村の社会と生活（Ⅷ）——

Brahmin and Scheduled Castes in Dhādekī-Sālhāpūr——

A north Indian village (VIII)

佐々木　明

本稿では Brahmin と被差別 castes (Chamār・Bhangī) の，（i）家族を中心とする親族組織，（ii）jātī (caste) 職業を中心とする諸活動，を記述する。絶対数の多い被差別 jātī 家族の構成・親族組織を理解するにはある程度長い記述が必要であり、被差別 jātī と中間 jātī（職業 jātī に Brahmin を加えたもの）の家族構成・親族組織を比較する必要もあるので，被差別 jātī と中間 jātī を加えた「非支配 jātī」（村の全 jātī から支配 jātī《Jāṭ》を除いたもの）の家族構成・親族組織を記述する項目を，Brahmin・被差別 jātī の項目の間に設けた。前稿と同じく，本稿で述べる三つの jātī，特に Brahmin の実態は，固定的 Hindū 農村像から想像されるものとは大きく異なる。本稿の内容が通説と異なるとすれば，Dhādēkī の三つの jātī の生活が北インド農村の当該 jātī としては常軌を逸脱しているか、または通説が北インド農村の Brahmin・Chamār・Bhangī の実態とは無関係に構築されているか，のいずれかを考えざるをえないのも、前稿と同様である。

（I）

Dhādekī の Brahmin には Sharma 姓の4家系（khāndān）[1] がある。家系Aは開村当時からの居住者とされ，5世帯からなる。家系Bはやや遅れて県内他地域から入村したとされ，2世帯からなる。家系C（2世帯）はそれほど古くない時点で Punjab の Rohtak から移住してきたという。家系D（2世帯）は19C後半に周辺小都市から移住してきた[2]。登録家族と聴取世帯構成とが大きく相違し，双方を並べると繁雑な説明が必要なので，後者のみを述べれば，基礎家族1，同居者の加わった基礎家族5，二世代夫婦世帯1，同居者の加わった二世代二夫婦世帯1，一世代二夫婦世帯2，同居者の加わった二世代三夫婦世帯1，である。住居群は abadī の西北と東北に二つあり，他の職業 jātī と井戸を共用し家系A・Bを中心とする西北群が古く，家系C・D の住む東北群は旧 abadī の外側にあり明らかに新しい[3]。

Brahmin が農作業を忌避すると考える立場もあるが，Dhādekī では1世帯[4]を除き他は小規模農民である[5]。Jāṭ から若干の寄進地——無料小作地をもらって入村するのが通例だから，入村当時に多少の積極的宗教機能を想定する余地はあるものの，入村後の全期間を通

じて農民的性格が強かったことを否定できないだろう。寄進地はせまく，経営規模が小さいので，農業労働者を雇う必要も余裕もないから家族労働力に頼って経営し，充分な役畜を飼うだけの飼料をつくる畑（佐々木，1986;p. 41）がないから必要に応じて Jāṭ から役牛を借りざるをえない(6)。Brahmin と Jāṭ の農作業の差を個別に検討していないから，個々の作業での忌避が存在する可能性を完全には否定できないが，農作業をしている Brahmin は宗教的忌避を日常的に意識してない上に，農作業の少なくとも一部を忌避する小規模な家族労働的農業経営は一般的に考えにくい(7)。

Arya Samaj 運動の浸透以前の Dhādekī では，無料小作地・食事等を，積極的の活動ない Brahmin に，与えることに Hindū 固有の儀礼的意味を認めていたらしい(8)。伝統的農村では，特定の Brahmin をよぶ Jāṭ 世帯群は一定し，Brahmin 家系が複数化したのは，一部の Jāṭ 世帯が新たな Brahmin を村外からよんで定住させた結果とみられる。Brahmin が一世帯の生活を可能にする程度の無料小作地を与えられて Dhādekī に定住しても，一家系あたりの世帯数が増加していくには，支配 jātī が長男子出産時に偶発的に寄進する無料小作地の面積が一定水準に達することが前提となる。寄進地が広大であれば，寄進された Brahmin が地主化することもあるだろうが，住民の記憶に残っている時代には広大な無料小作地を寄進されることはなく，世帯数増加には追いつかない程度の寄進にとどまったらしい。寄進が一回だけでも，充分大規模（たとえば mauza 単位）ならば，寄進者の占有権が実質的に及ばず，寄進をうけた Brahmin の許可をえた他 jātī の人々が広い耕地に入殖して，Brahmin を支配 jātī とする農村社会が形成されたろう。「Brahmin の村」が成立する可能性が，広い不耕地のあった Mughal 期には現在より遙かに大きかったのは確実である。Dhādekī では中間 jātī の一つにすぎない Brahmin も，「Brahmin の村」では Dhādekī の Jāṭ 同様の支配性，優統性を発揮するから，Brahmin が北インド農村でも優越的存在であるとする考え方を合理的に解釈するには，その考え方のモデルがたまたま「Brahminの村」だったと考える他はないだろう(9)。

支配 jātī の通過儀礼に列席した非支配 jātī Brahmin のえた伝統的現物収入（穀物・飼料等）は平均すれば Chamār の収穫時収入の約2倍に相当した（Lewis and Barnouw, 1956:p. 76）から，充分な寄進のある通過儀礼がタイミングよくあれば生活には困らなかった。しかし，寄進を伴なう通過儀礼が不定期であることに加えて，寄進側の非 Brahmin 支配 jātī 世帯数にくらべて寄進をうける非支配 jātī Brahmin の世帯数が，絶対数では充分小さくても，相対的には過剰になりやすい傾向があり，寄進以外の収入を確保する必要があり，無料小作地を支配 jātī からえて自ら耕作するのが通例だった（Sharma, H. P., 1971:p. 170）から，Brahmin の伝統的な消極的宗教機能と農民性は切り離せない複合を形成していた。結局，非支配 jātī Brahmin は安定的小作権を認められてはいる（Lewis, 1956:p. 68）が，雑多な副業をもつ零細耕作者にすぎず（Freed, 1970:p. 76），家族構成も小さく（Kolenda, 1966:p. 147），部分的 anāj jātī 型（佐々木，1987:p. 11）の中間 jātī農民（Etienne, 1968:p. 80）に他ならなかった(10)。

北インドでは，非 Brahmin が支配 jātī である農村の Brahmin は「お義理」の存在であり（Mandelbaum, 1955:p. 93），自らが支配 jātī である農村の Brahmin が支配的であったのは，古代インド文化とは無関係に（Cohn, 1960:p. 246），Brahmin が支配 jātī だっ

たからにすぎない。北インド農村の Brahmin は自らが Musalman でないと意識する Rājpūt・Jāṭ その他の北インド固有の支配 jātī から土地を寄進され定住したが，多くは寄進地が狭かった結果，小規模農耕と通過儀礼列席を「兼業」していた（Pradhan，1966：p. 41）。一般に寄進する支配 jātī 世帯占有地の広狭と，寄進地を含めた寄進総量とは密接に関係するだろう。支配 jātī の相続が男子均等分割を原則とすることを念頭におくと，ある村ではその成立当初ほど寄進総量（とくに寄進地）が多く，支配 jātī 世帯数が増加して一世帯あたりの占有面積が縮小すれば寄進総量（とくに寄進地）も縮小するとみてよい。

Brahmin への土地寄進の慣行が非常に古い時点からの習慣ならば，ランダムに繰り返される村落の形成・放棄，村落存在中に進行する一世帯あたり占有地の縮小などにより，北インドのどの地域をとっても Brahmin のおかれた状況は均質化し，同じような Brahmin の密度が現在までに実現していてもよいと考えられる。ところが，現在でも世帯あたりの経営面積が多く不耕地も広い北インド南部一帯で Brahmin 率（全居住者に占める Brahmin の人口の比率）が高く，世帯あたりの経営面積が小さく不耕地も少ない北インド西部で極端に低い傾向を有する（Schwartzberg，1968：pp. 101，104，1978：p. 107）。Brahmin 率のこの地域的傾向は，Brahmin への寄進慣行が非常に古い時代から連綿として続いてきたのではなく，北インド西部では世帯あたり土地占有量が縮小しはじめ耕地比率も一定水準に達する一方で南部では世帯あたり土地占有量が縮小せず耕地化率も低水準にあった時期，おそらく Mughal 期初頭を大きくは遡らない時期に普及した習慣であることを示唆するだろう。

北インド農村社会に関する様々の断片的情報を総合すると，この社会の原型が確立する過程では Brahmin は普遍的存在ではなく，基本的パターンの形成後に Brahmin が加わったと考える方が妥当であるとせざるをえない。たとえば，非 Brahmin の支配 jātī が Brahmin に土地を寄進する慣行はあるが，その逆の慣行がないことを考慮すれば，Brahmin を支配 jātī とする村が成立する時点には，おそらくは Brahmin 抜きで非 Brahmin を支配 jātī とする村落社会が成立していたはずだから，Brahmin を支配 jātī とする村落社会の構造が非 Brahmin を支配 jātī とする村落社会の構造に似ているのは，古代インドから続いた Brahmin の支配性に基づいて形成されていた「Brahmih の村」を「非 Brahmin の村」が模倣したとみるより，後から成立した「Brahmin の村」が先に成立していた「非 Brahmin の村」と同じ構造を有するに至ったとみる方が自然だろう。

北インドの非支配 Brahmin は「身分の低い農耕 jātī とほとんど同列」（Ganguly，1974：p482）(11)であり，非 Brahmin 支配 jātī は彼等を kamīn とみなして，彼等の手から食事をうけとるのを拒否する（Lewis and Barnhuw，1956：p. 19）。一部の「Brahmin の村」を除けば，北インド農村では Brahmin が原則として明瞭な中間 jātī を形成し，しかも jātī の順列に宗教的色彩を見い出しがたい一般的傾向は，Brahmin を頂点とする宗教的構造が先行していたと仮定すると合理的解釈が非常に困難だが，以上の経過を想定すれば理解が容易であり，しかも北インド農村が，Brahmin を通過儀礼に列席させて寄進すること以外には，特に 'Hindū教' 的な習慣を有さないことも整合的に理解できる。大局的には，その村落の支配 jātī が Brahmin に寄進をしたことがあ（るかまたは支配 jātī が寄進をうけた Brahmin であ）ればその村が「Hindū である」とみなされる状況下で，支配 jātī が自らを非 Islam であると意識して，Brahmin に各種の寄進をする慣行が普及した時期から長期間を経て，現在の Brahmin 状態が出現したとも考えられる(12)。

(Ⅱ)

Dhādekī の Chamār 世帯数は Jāṭ につぐ。Jāṭ 一世帯が Chamār 一世帯を常傭する慣行だったから，Jāṭ と Chamār の人口・世帯数がほぼ同水準なのは当然である。しかし，Salār 姓単一家系世帯群をなす Jāṭ とは対照的に，Chamār は無姓の小家系集団多数を形成する。家系群を規模別に分類すると，7—9世帯によりなるもの4，4—5世帯よりなるもの6，3世帯以下よりなるもの16である。職業 jātī（佐々木，1987: p. 18），これに Brahmin を加えた中間 jātī，さらに被差別 jātī を加えた非支配 jātī の家系は一般に小規模である。長期的には，耕地拡大の余地が大きければ土地を貸し出しやすいので，小農民的非支配 jātī が多少過剰になっても，余剰労働力を雇入できる支配 jātī には有利だが，全支配 jātī の経営総面積がふえ，貸し出すべき耕地の余裕が少なくなるに従って非支配 jātī を除々に排出し，耕地拡大の余地の大きい農村に放出する傾向があるのだろう。非支配 jātī に多数世帯からなる家系が存在しないのは，非支配 jātī がある程度大きくなると強力な支配 jātī の増大する力に圧迫されてそれ以上の家系の拡大が不可能になる結果であるともいえる。

職業 jātī では，anāj jātī 群には4世帯以上の家系がないのに対し，非 anāj jātī 群では4世帯以上の家系が4，3世帯以下の家系が6であるから，jātī 職業の比重が大きいほど家系規模が小さく，逆に農業収入の比重が大きいほど家系が大きい傾向が認められる。Chamār が実質的には農業労働者であり，一部が ghēr に bataī（佐々木，1986: p. 41）の水牛を飼い，一世帯が犁をもつ自作農であることなどが，Chamār には中間 jātī にない8世帯以上の家系が3つ存在する原因だろう。Jātī 職業への依存度の高い家系ほど構成世帯数が少ないのは，jātī 職業に拡大の余地が小さく，「分家」しにくいからだろう。

Dhādekī の Chamār・Bhangī の家族構成は，基礎家族約28%，同居者の加わった基礎家族24%，基礎家族より小さい構成18%，複夫婦家族約30%（二世代二夫婦家族10%強，単世代複夫婦家族約15%，二世代複夫婦家族5%弱）である。中間 jātī に比べ単世代複夫婦家族が多いのは，成人した子供の結婚後両親が生存する期間がやや短く，また住居を手に入れにくいので結婚した兄弟等が同居する傾向が強い結果だろう。

Chamār・Bhangī の家系群を世帯数のほぼ等しい上・中・下層の3群に分類して家族構成を記述する。中層（全体の1/3：ghēr をもたないが「古い」と形容される安定した農業労働者）の家族構成では，同居者を加えた基礎家族がやや多くて約30%，複夫婦家族がやや少なくて20%（二世代二夫婦家族7.5%，それ以外の複夫婦家族12.5%とともにやや少ない）である点が多少目立つが，Chamār・Bhangī 全体の値に最も近い。上層（全体の1/3強：ghēr をもつ世帯）では，二世代二夫婦家族が中層の約3倍である一方，同居者の加わった基礎家族が著しく少ない点が目立つ。中層では同居する子供の結婚後短期間で片親が死亡し，同居者（生存する片親）の加わった基礎家族が形成される機会が多いが，生活条件のやや良い耕作者的な上層では，同居する子供の結婚後も両親が長期間生存して二世代二夫婦家族を形成する機会が多い結果であろう。下層（全体の1/3弱：村落間移動性の高い農業労働者）では，単世代複夫婦家族が中層の約2倍に達する一方，夫婦のいない世帯が中層の約1/5しかいない。二つの特徴は，下層では住居獲得が極度に困難な結果(12)，結婚した子供達が同居を余

儀なくされる（両親は早く死亡する）こと，夫婦のいない世帯が独立して居住できず他家族に同居させざるをえないこと，に起因するとみるべきだろう。

非支配 jātī（Jāṭ を除く Dhādekī のすべての jātī）の平均的家族構成に最も近いのは職業 jātī の anāj 群（佐々木，1987: pp. 11—14）で，被差別 jātī の上層もこれに近い[13]。全体の 1/4 が無夫婦世帯，1/3 が基礎家族，1/12 が同居者の加わった基礎家族，1/6 が二世代二夫婦家族，1/6 がそれ以外の拡大家族である。職業 jātī の anāj 群・被差別 jātī 上層に共通するのは，村内の jātī 関係[14] に基づく収入が安定した生活を保証する点である。上記 2 群にやや近い家族構成を示すのは，無夫婦世帯が著しく少なく，二世代二夫婦家族がやや少なく，一世代複夫婦家族がやや多い職業 jātī 非 anāj 群(ibid.; pp. 11, 16-17) である。労賃に依存するこの群では，夫婦の一方を欠くと収入が生活を維持できなくなるので無夫婦世帯が存在しにくく，住居を調整する余裕がないので複夫婦家族化しやすいが，同居する子供の結婚後短期間で両親が死亡する傾向があるのだろう。

Brahmin と被差別 jātī 中・下層の家族構成は平均的でない。被差別 jātī 中層で同居者の加わった基礎家族が多いこととその原因については既に述べた。Brahmin の家族構成は特異である。単夫婦家族[15] のシェアが，非支配 jātī 平均の 1/2 以下，他群の最低値の 2/3 以下であり，二世代二夫婦が少ない分だけ二世代複夫婦家族が多い。Brahmin では両親の生死に関係なく結婚した子供（兄弟）が同居する傾向が強いことを指摘してよいだろう。Brahmin のこの「joint family 志向」を宗教的現象とするのは，宗教的 caste 秩序では最下層の被差別 jātī のさらに下層と Brahmin の家族構成が近似することを考慮すると，明らかに拙速である。被差別 jātī 下層でも，無夫婦世帯を構成しそうな部分が基礎家族に加わる同居者になる傾向がみられ，二世代二夫婦家族と基礎家族が合併して同世代複夫婦家族に転換しているらしいこと，およびこの傾向が住居拡大の困難と両親の短命に起因すると考えられることには言及した。Brahmin 世帯の複夫婦化傾向も，同様の要因に帰すべきだろう[16]。

職業 jātī の部分的 anāj 群(ibid; pp. 11, 14-16) の家族構成は非支配 jātī の平均から最も離れている。全体の 2/3 弱を基礎家族がしめ，拡大家族がやや少なく（1/4 強。特に同世代複夫婦家族がない点が注目される），無夫婦世帯も特に少ない。他群では，基礎家族に加わって同居者になるか，村内に残留して無夫婦世帯を構成すべき部分が，村内雇用が不安定である結果村外に流出する一方，abadī の外側にこの群の居住区が新設されて基礎家族をつくりやすいことから，家族構成が特異な傾向をしめすと判断してよいのだろう。

北インドに限らず非支配 jātī の家族構成を詳細に検討した報告がないので，以上の考察からは二つの傾向を指摘するのにとどめるのが妥当だろう。

（i） 平均寿命が長い・早婚で子供の結婚時の両親が比較的若い，などの条件により同居する子供の結婚後長期間両親が生存すれば，二世代二夫婦家族が増加し，生存する片親を主とする同居者の加わった基礎家族が減少する（一般的な人口学的条件）

（ii） その jātī の居住区を支配 jātī の住居が取り囲む，または極度の貧困などから，住居拡大が困難ならば一世代複夫婦家族が増加し，容易ならば他の形態が増加する（身分規制に関連する住宅供給条件）

Neolocal な住居拡大が可能ならば，息子夫婦が両親と同居して短期間の両親生存中は二世代二夫婦家族・片親死亡後は同居者（生存する片親）の加わった基礎家族の二形態をとる

場合を除き，原則として基礎家族を形成し，一世代複夫婦家族形態を忌避しているとみてよいだろう。

既述の Jāṭ 家族（佐々木，1982: p. 62）とは，一世代複夫婦家族の忌避傾向・二世代二夫婦家族志向の点で共通するが，基礎家族が多いこと・無夫婦世帯がより大きい家族に吸収されにくいことの2点では Jāṭ と非支配 jātī が傾向を異にする。非支配 jātī に基礎家族が多いのは，結婚後同居すべき子供の数がやや少ないこと，子供の結婚後同居すべき両親の生存期間がやや短かいこと，複数の基礎家族的単位が同居する広い住居を用意しにくいこと，などによるのだろう。非支配 jātī で無夫婦世帯がより大きな家族に吸収されにくいのは，単独生活者・欠損家族的世帯が地位にふさわしくない行動をとるのを予防しようとする意識の強い支配 jātī では当該部分を広い住居に住む近親家族にできるだけ吸収しようとするのに対して，非支配 jātī では上記の意識が弱いかまたは住居が狭くて吸収できないかの少なくとも一方の原因が作用する結果だろう。

（Ⅲ）

被差別 jātī は Dhādekī の abadī に隣接した居住区に隔離状態で住んでいる（佐々木，1981: p. 59）。炊事用燃料を手に入れにくい住民が居住区内で燃料を過採集する結果，被差別居住区では樹木が消滅するので，遠くからでもそれと知られる(17)。この居住区の一室住居（佐々木，1982:p. 56）に，ほぼ基礎家族単位を形成する Chamār・Bhangī が住んでいる。差別されない jātī の住む abadī の道路は，牛車・tractor 等が往来するので，雨季以外には交通の困難がない程度に整備されているが，車輛を保有できない被差別 jātī には道路を整備する資力がないので，人が歩ける程度の幅の高低のある細長い空間が庭と庭の間に曲りくねって続くだけである。Chamār・Bhangī が，差別されない jātī と同じ牛車にのれず，止むをえなく同乗する時には末座（尾部）に座らせられるなどの差別を受けていることはよく知られている。しかし，この種の制限は，程度の差はあるが，すべての jātī 間に観察され，制限によっては同一 jātī 世代間にもみられる（佐々木，1982: pp. 53-55）。差別されない jātī が被差別 jātī に接触することにより何等かの超自然的支障が生じるとの思想は村民にはなく，被差別 jātī との接触後に，差別されない異 jātī との接触後とは異なる特別な儀礼的浄化を行っていない(18) などから，差別が儀礼的であるとみなすのは妥当でないと判断される。

Chamār（<chamra, charma, cham:「生皮」）の jātī 職業は生皮を採集し，町の Musalman 加工業者に売ることとされる。病気その他により牛・水牛が自然死した場合にのみ生皮を採集し，生皮採取を目的として屠殺することはないとされている。いま一世帯の Jāṭ と一世帯の Chamār が対応し，Jāṭ の飼う二頭の牛と二頭の水牛，Chamar の飼う一頭の水牛が全部自然死し，Chamār が習慣により村の溜池で皮を剝ぐとの不自然な仮定(19) をしても，牛・水牛の寿命から考えて，約 4.5 年に 1 回しか皮剝の機会がない。Jāṭ の家畜がこれよりやや多く，中間 jātī が若干の水牛を飼っていることを認めても，牛・水牛が全部自然死するとは到底考えられないから，皮剝の機会は 5 年に 1 回以下の頻度とみなされよう。皮はぎは，その頻度・安定性から Chamār の主収入源とは考えがたく，副収入としても副次的であったとみるべきだろう。

皮はぎ以外の職業は農業労働である[21]。Zamindari abolition 以前には，特定のzamindār (Jāṭ) 世帯の riyayā として世襲的雇用に従ったが，民族誌的調査では具体的内容を把握しにくい[22]。ただし現在でも身分的差別は残り，中間 jātī の農業労働者は Jāṭ の ghar の rusaī（佐々木，1982: p. 56）に入れるが，Chamār は ghar には原則として入れず，食事の際も ghar の maidān の床に座る。Chamār 労働者への農閑期賃金は二枚の rōṭī と sabjī（佐々木，1984: p. 16）であり，富農でも rhātā[23]を加える程度であるが，祭礼時には質量ともに充実する[24]。

（Chamār・Bhangī 被差別 jātī の項目は続稿へ）

註

（1）「家系」相当語は Jāṭ・Brahmin では khāndān (P.) だが，他の jātī では got (H.) を用いる。

（2） 入村当時は村の patwarī（書記）だった。無料で Jāṭ から借地して，当時としては高額の1ケ月 7 Rs の給料をためる一方，土地台帳を操作して土地を集中し，小地主になったといわれている。19 C 中葉には所有の不明な未耕地が残っていたので，土地登記を操作できる者には集中も可能だったのだろう。2世帯のうちの1世帯にはこの地方で有名なオピオン・リーダーがいて，Dhādekī の Jāṭ も表向きは敬意を表しているが，やや異質な存在と感じているようである。

（3） 家系C・D入村時には，中間 jātī の伝統的居住区だった abadī 西北隅に空閑地がなかったので，abadī に隣接し，しかもたぶん被差別 jātī 居住区には隣接しない空閑地を探したのだろう。

（4） 小地主化した家系Dの1世帯。

（5） 隣村の地主自作農・支配 jātī は Brahmin である。Dhādekī の Brahmin は，農業労働者にはならないが，各種の「農民」である。

（6） 多少の家畜（主に雌水牛）を飼い，飼葉切り等の簡単な設備はもっている。

（7） この地方では，非支配 jātī Brahmin の「農耕忌避」が「無料小作農地が狭いので支配 jātī と同質の農業経営ができない」を意味し，支配 jātī Brahmin の「農耕忌避」が「農業経営はするが，農業労働はできるがかぎり riyayā・mazdūr にまかせて，自分ではしない」を意味するとも考えられる。

（8） Brahmin の伝統的な儀礼的機能が通過儀礼の単なる列席にあり，積極的な祭祀的行動をとらず，ghar 内で女性を中心に祝った暦祭には列席さえしなかったことは北インド農村社会の常識である (Mandelbaum, 1962: p. 35)。既に指摘したとおり，通過儀礼での pandiṭ (Hindū 聖職者) の積極的活動は近代的な現象であり（佐々木，1981: p. 394)，逆に Brahmin の生活でも pandiṭ 活動は副次的位置を占めるにすぎない。Dhādekī では B 家系の1世帯が専業，2世帯が副業とするだけで，他の Brahmin は「mantra さえ憶えていない」とみなされ，pandiṭ の仕事を依頼されることがない。しかも，失明した元学校教師である唯一の専業 pandiṭ も，先祖代々継承してきた宗教的知識を活用しているのではなく，近代的インテリとしての諸能力（特に祭式とその思想に関する英語文献解読能力）を駆使してこの仕事を始め，近親者に口頭で教えて副業 pandiṭ の活動を可能にさせているらしい。Ayūrvēdik（佐々木，1983: p. 83）同様，Brahmin の jātī 職業的宗教活動の前提に近代教育があることに注目すべきである。Dhādekī の専業 pandiṭ は村内の需要をほぼ満たす上に，他村にも行く。逆に，村内の pandiṭ が適当でないと判断する Jāṭ は村外から臨時に呼んでいるなど，pandiṭ・Jāṭ 関係は随時・個人的である。Jāṭ・pandiṭ 関係は，Brahmin の pandiṭ 活動が伝統的であったとするには余りに不安定であり，この活動が近代的であることを傍証してい

るとみてよい。

(9) Weiser が，宗教的優位に立つ Brahmin を頂点とする jajmānī のモデルとした 'Karimpūr' は 18C 中に定着した Brahmin を支配 jātī とする「Brahmin の村」だった (Wadley, 1976: p. 152)。

(10) 通過儀礼に列席して寄進をうけた非支配 jātī Brahmin は Brahmin 全体の 17% 程度とされる (Sharma, K. N., 1961: p.147)。この約17%が他の収入（特に小耕作）にも頼っていたことを考慮すれば，Brahmin が部分的 anāj jatī のカテゴリーに入ることは明らかである。現代では非支配 jātī Brahmin 雇用の村外流出は特に顕著で，村内に居住しても都市に通勤する場合が少なくない (Sharma, H. P., 1971: p. 171)。

(11) Mencher, 1974 へのコメント。引用中の「身分の低い農耕 caste」は Mālī などをさす。

(12) 宗教的知識が全くなく (Freed, 1969: p. 680)，寄進され接待されるだけの Brahmin へ対して，農村社会の最大の財である土地を喜んで寄進させる「尊敬」を非 Brahmin 支配 jātī が抱いた事態はやや考えがたい。Brahmin への寄進の動機を考える上で注目したいのは非支配 jātī Brahmin の密度が，Mughal 等の首都周辺の西部 Uttar Pradesh で高く，Mughal 期に開拓前線が通過したとみられる Uttar Pradesh 東・南部に支配 jātī Brahmin が多い (Schwartzberg, 1968: p. 103) ことである。中・近世中に Brahmin への土地寄進が半ば政策的に促進されたとすれば，その影響は首都周辺と寄進すべき不耕余剰地の多いその当時の開拓進行地域に強くでるとみられるから，北インド農村の Brahmin の分布をみるかぎり，ある時期から普及した Brahmin への寄進には Mughal 等の政体の方針が絡んでいた可能性を指摘できるだろう。

ある時期に Brahmin への土地寄進が盛んになったと仮定すると，この「Brahmin 需要の急増期」には供給（Brahmin 人口の自然増）が需要に間に合わず，Brahmin 以外の人々が Brahmin に「紛れこんだ」可能性も考えられる。もちろん，Kanya-Kubja Brahmin などでは中近世以前からの Brahmin としての系譜的連続性が認められるが，特に北インド西半の農村の Brahmin には系譜的伝承が稀薄な事例が多い。「Brahmin 需要急増期」以前の北インド農村には Brahmin が特に必要でなかったらしいことを考慮すると，北インド西半では Brahmin が極端に少なかった所にある時期を境にして，広汎な寄進運動がおきたことも考えられる。この時期以降，系譜的連続性を確認できる Brahmin に寄進できた支配 jātī もいたが，系譜的 Brahmin に寄進できないので，特定の「Brahmin に似た」jātī（複数？）の一部を Brahmin にみたてて寄進せざるをえなかった支配 jātī が多かったことを想定できるだろう。寄進により部分的に Brahmin 化した jātī がいたとすれば，可能性の最も高いのは Nāī であろう。

Nāī の Brahmin 化説は唐突ではあるが jātī の「分裂」(Atal, 1967: p. 26) を想定しているにすぎない。Nāī Brahmin 化説を支持する現象は少なくない。Naī が Brahmin と競合的な儀礼機能をもち，支配 jātī からの現物支払い（≒寄進）が両者で近似するなど（佐々木，1987: pp.15, 16）に加えて，Nāī が最も普通的な中間 jātī であることも部分的 Brahmin 化慣習の成立には好都合だったろう。さらに Hariana の Nāī と Brahmin の組織が重合し，対立関係にあった (Beidelman, 1959: p. 48) ことには特に注目すべきである。北インド農村の本来の儀礼的 jātī だった Nāī を主体とする人々を支配 jātī が Brahmin とみなし，中世以前からの系譜的連続性を有する Brahmin と同様に土地を寄進し，定着させた可能性は検討に値するだろう。Nāī に起源することも多い近世 Brahmin が Nāī の儀礼機能を蚕食してきた完成段階が近代の Sanskritization であるともいえよう。Punjab の Musalman 農村のイスラム的人格崇拝 (Ahmad, S., 1970: p. 106, Eglar, 1960: p. 61) と比較すると，北インド農村の寄進をうけるだけの Brahmin 崇拝は，直接的には中世イスラム・インドの Fakīr 崇拝が Brahmin を対象とするように変化したものであるとの印象をうけないこともない。

(12) 中上層では2世帯以上になるべき人々が下層では同居して一世帯を形成するから，家系の規模も小さく，一般に2世帯以下である。

(13) 被差別 jātī 上層では，無夫婦世帯・二世代夫婦家族がやや多く，基礎家族・一世代複夫婦家族がやや少ない。

(14) 職業 jātī anāj 群では jātī 職業が，被差別 jātī 上層では jātī 職業（Bhangī）と安定的農業労働者雇用・bataī（Chamār）が，安定した収入をもたらす。

(15) 基礎家族と同居者の加わった基礎家族を合わせたもの。

(16) この背景には，借地権が他 jātī にくらべて強くなる傾向のある Brahmin の宅地拡大を好ましく思わない Jāṭ が，実質的に Brahmin を狭い宅地に封入する意向をもっていることがあるのだろう。

(17) 被差別 jātī 住居の焼成レンガ化が他よりも遙かに遅れ，平屋ばかりだったので，その点でも，遠望して識別できた（佐々木，1984: p. 20）。

(18) 被差別 jātī との接触後は不浄になるとみなされているので，接触後は水浴する，などとして，あたかも水浴に特別な意味を認める記述があるが，水浴は外出帰宅後・作業前後の日常的な行為（佐々木，1984: p. 16）にすぎない。差別・不浄・水浴をことさら儀礼的に結びつけるのは合理的に説明できないこじつけとしか考えられない。Dhādekī では，Bhangī 女性が jātī 職業の必要上 Jāṭ の ghēr に入り，Chamār 男性に Jāṭ 男性が作業中に触れるのは日常的だったが，これらにより，Jāṭ の儀礼的地位が低下するとの思想は全くなく，低下した地位を復旧すべき儀礼的慣行も観察されなかった。

(19) 村内には幼・老（水）牛の数が少ないから，壮（水）牛を村外から購入し，老（水）牛を村外に売却しているのは確実で，村内で飼われている牛・水牛が村内で寿命を終えて自然死するとのこの仮定は非現実的である。

(20) 現在では自然死した家畜は，Panchayat が地区の委員会に手わたし，この委員会が jātī に関係なく指名した tekedar（実際には Chamār）が皮を剝ぐ。

(21) Chamār の就業には特に制限がないので，どんな仕事でもよい（Majumdar, et al., 1955:: p. 211）が，農村では農業労働が最も多いので，結果的に農業労働が主収入源である。

(22) 前近代的な zamindār-riyayā 関係を改善しようとした zamindar abolition の結果，Chamār の雇用は短期化し不安定になり，村外雇用（主として建設業労働）を求める傾向が強い。Dhādekī は小都市の「通勤圏」にあるので，2戸に1戸程度の比率で，Bhangī をふくめた40～50人が毎日出勤する。都市賃金はやや安いが，教育の普及により差別の少ない村外雇用を選択するようになったと Jāṭ は解説する。しかし，農閑期には村内労働の大半が失業しているので，農閑期に労働力が村外に流出していても，Chamār が在村していてくれれば，短かいが，大量の労働力が必要な農繁期に必要な労働力を確保できるので Jāṭ には有利だろう。

(23) Ghī をつくったあとの酸乳。chhacchā ともよぶ（佐々木，1984: pp. 26, 27 n. 39）。

(24) rōṭī·sabjī ともに2倍量にして，dāl·sakkar などを加える。ただし，Dussairā どの大きな祭り（佐々木，1981: p. 29）に限られる。